

可認物便郵種三第省信遞日六廿月二十年一十三治明  
(行發〔日五十、日一〕回二月每)行發日一月六年五十三治明



# 改教時報

第十八號

## 目次

### 社説

本誌の改良

### 論説

佛教界の二大要件(完)

文學士 有馬祐政

精神病者

水谷斗南

### 雜錄

獨乙たより(完)

文學士 K F 生

佛教辯士の評判(六)

自稱辯士

### 今昔

前田利家(六)

百目木劍虹

### 社會

◎淫祠の蔓延 ◎内務省の干渉 ◎選舉法の解釋 ◎教界彙報

### 會報

會頭北陸巡回日誌(完)

六曰本佛敎徒同盟會綱領

- 一、佛敎本來の面目を發揮して、各自の信念を確立し、國民の道徳を涵養し品性を陶冶する事。
- 二、佛敎の本旨に基きて人道の大義を唱導し、精神的結合によりて國民の一致を鞏固にし國家の隆盛を企圖する事。
- 三、佛敎護持の責任を全ふし、健全なる宗教界を形作る事。
- 四、各宗僧侶を獎勵し、其學徳を高めしめ、又從來の惡弊を改善せしむる事。
- 五、公認敎制度を調査すること。
- 六、社會問題を講究して、慈善事業を起し、社會の改善を企圖する事。
- 七、佛敎の精神に基ける諸種の教育特に普通教育女子教育を獎勵して、善良なる家庭を形作りしめ又社交を融和せしむる事。
- 八、積極的方針を取り、實業道徳を鼓舞する事。
- 九、敎界の組織及儀式をして時勢に順應せしむる事。
- 十、社會に於ける一切の迷信を勦絶する事。
- 十一、殖民傳道を獎勵する事。
- 十二、佛敎の光輝を發揚し、其感化を普く世界に光被せしむるの策を講ずる事。

政教時報

本誌の改良

本誌世に出て、より將に五星霜、號を重ねること既に八十に滿てり、既往を顧みれば感慨胸に滿てるものあり、起て將來を望めば、天下益々多事、殊に敎界の前途頗る暗鬱たるものあり、されど吾人は闇黒の後に光明の赫けるを確信するもの也、吾人佛陀を信するもの、努力して德音の宣傳を勉め、清淨なる世界を實現するの時にあらずや。

社會は益々腐敗して宗教の要求を急ならしめ、靈界の飢渴甚しくして信仰を呼ぶこと切なり、吾人は確信す、社會近時の趨勢はたしかに宗教要求者の勃興著しきものあり、而して其要求は満足されたるか、信念果して確立せられたるか、吾人頗る疑なき能はず、救済の道近きあり人之を遠きに求む、又宗教の皮相を弄して其心髓を忘る、嗚呼痛ましき哉、精神上の苦悶者、天下何者か、より憐むべきものあらむや、彼の呼びは吾人の胸裡に共鳴し來る、求むるものは遂に得へし、冀くは共に佛陀の靈光に浴せむかな。

宗教界の言論亦正さに盛なり、理論的講究を事とするあり、歴史的講究を事とするあり、言語學的講究を事とするあり、或は新と呼び舊と叫び、主觀と云ひ、客觀といふ、而して是佛陀の大法が多方面に開展せるを證する所以にして此等の講究

(一)政教時報第七十九號目次

社説 時事偶感◎武士道……………(文學士有馬祐政)

論説 佛敎界の二大要件……………(文學士北村教嚴)

雜錄 ◎獨乙たより……………(文學士KJ生)

◎佛敎辯士の評判(五)……………(自稱辯士)

◎佛感二則……………(曉鳥敏)

信 本問氏事跡略考……………(菊池秀吉)

會 西印度の慘事等……………

本誌廣告

一、本誌は毎月二回(一日、十五日)發行とす

二、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應せず

三、本誌代金は必ず小爲替にて送附の事但し郵券代用の節は五厘切手にて一個増の事

四、本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	全
金貳錢五厘	金五錢	金三拾錢	金六拾錢	無過送料
◎廣告料五號活字一行(二十七字計)一回金拾錢				國

一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事

二、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地大日本佛敎徒同盟會出版部」とせらるべし

發行所 大日本佛敎徒同盟會出版部

東京市本郷森川町一番地

明治三十五年五月廿一日印刷

明治三十五年六月一日發行

發行兼編輯人 清水朝太郎

印刷 清水朝太郎

か四方に門戸を開きて入門の士を誘ふを喜ぶ、唯庶幾くは舊來沈滞化石せる敎界の氣風を一掃し、新鮮なる光りを興へ殊に空論虚談を避けて宗教の本義たる救済の事實を確認して以て佛敎の生命を發揮し、百川の大海に朝宗するが如し、實踐躬行佛敎の殿堂を經營し莊嚴する上に於て大成せられむことを、是れ吾人の切望に堪へざる所也、

宗教界の事業亦正さに勃興するを見る、全國諸種の團體組織せられ、或は慈善に、或は教育に、或は傳道に、或は出版の趨勢に顧みて、佛敎主義の事業續々勃興するを望み、且大に之を促さむとするものなり、されど宗教的事業は信仰を以て其動機とし救済を以て其目的とする事を忘るへからず、世上事業の爲めに事業を爲すものあり、是れ事業の腐敗入り安き點にして他の非難を免れざる所以、然れども信仰は事實に顯はれ來りて初めて救済の力最も強大也、腐敗し安き地にありて、腐敗せざるだけ、腐敗せる社會を救済し得る所以也、此點に於ては佛敎者其面目を一新するの覺悟なかるへからず、庶幾くは各地に於ける團體が先づ鞏固なる基礎の上に立ち、秩序的行動をなし、百般の事業も漫に擴張のみを謀らずして實着の方針をとり、漸を以て大成せられむこと、是れ吾人の切望に堪へざる所也、

日本宗教制度の完成、たしかに一大問題なり、維新已後憲法を初めとして歐洲の制度文物を採用したるの結果、政治、經濟、殖産、工業、軍制、教育、一往整頓したれども、獨り

宗教に至りては依然として舊陋を脱せず、歐洲には歐洲の宗教ありて其經營頗る著しきものあり、而して我國社會の現狀を以て歐洲社會の現狀に比するに宗教の經營不整頓なる點たしかに一大缺陷の存するを見る、是今後の日本人が眞面目に解釋すべき問題也、吾人固より法文の急成を欲せず、寧ろ事實の大成を望むものなり、是れ宗派の異同によりて争ふべき問題にあらず、官民の相争ふべき問題にあらず、政黨の如何によりて相争ふべき問題にあらず、亦獨り宗教家のみに一任すべき問題にもあらず、一時急激なる運動によりて成功すべき問題にあらざるなり、吾人は斷言す、從來世上の言論すべき其眞を得ず、彼の制度文物を採用したる我國は、彼が制度と彼が宗教との關係を明瞭にするにあらずは、又我制度と我宗教との關係を明瞭にする事能はざるへし、吾人は聊か學ぶ所を傾けて、速き將來に於ける宗教的經營の大成を畫せむかな、

道義の沈淪は嚴格なる實踐主義を求め、徒らに學說を得て力強き動機たるものを得ず、教育の普及は漸次完成を告ぐると雖、未だ個人として必需なる靈性の開拓を興ふることなし、實業商業の發達を望むこと益々急にして何者か果して之か活力を興るか、經濟の發達は生活狀態に變化を來たし、社會問題、勞働問題は益々頭を擡げ來る、此等諸種の問題は今や正さに良解釋を求めつゝあるにあらずや、吾人佛陀を信するも其態度如何、茲に本誌次號より一大改良を施し、紙數を増加し、議論的

態度を避けて、實際的施設を事とし、文字平易を主として知識の普及を謀り、歐米諸國に於ける實例を擧げて以て參考に供し、基督教の經營を擧げ他山の石以て戒となさむとす、殊に宗教制度、慈善事業、社會問題、何れも歐洲多年經驗の結果にして、我國今後將に起らむとするもの殆む彼後を追ふの概あり、其一長一短、以て資するに足るものあり、殊に活用の中心は佛教の信仰を以て其生命とし、實行を以て要義とす一言以て本誌の改良を豫告する事如此、

論 說

佛教界の二大要件(承前)

有馬 祐 政

第二要件、經濟事業の整頓  
經濟問題は日本帝國の問題としても最も緊要にして而も最も困難なるものなるが、佛教界においては特に其の感甚だ切なるを覺ゆ、余輩は一家の經濟をさへ整理しかねる手腕と、僅に經濟通論を一讀したるに過ぎざるの智識とを以て、之れが整頓を畫策せんとするは、固より其の任にあらず、寧ろ空見に了はり夢想に止まるべきを處る。然れども、其の問題の餘りに緊要なるは、かゝることを自覺する余輩をして、全く其の困難を打ち忘れて、閑あれば默考苦慮せしめたること、實に幾返なるを知らざるなり。しかのみならず、之れを道友

に諮り、更に識者に問ひしことも、亦數回にあらざるなり。但し依然として有無虚實の間を彷徨し、未だ妙案良策出づるなきも、兎に角、熱心なる佛教家諸君の參考にもと思ひて、此に目下胸中に浮へるまゝを記述することと爲せり。豫め讀者の諒察を乞ふところなり。

現今我が日本の佛教界において、比較的いはゆる經濟事業の整頓せるものは、唯一の眞宗本願寺派のみ。その他は概ね經營として日日の維持に醜し、甚だしきは負財山の如く、債鬼門に逼まるの苦境に煩悶するもの、少からざるが如し、苟くも天下佛教徒たらん者一たび思ふて此に至らんか、誰人か長大思せざらん。噫、誰人か長大思せざらん。

各宗派の當局者、之れか爲めに諸種の方法を計出して、敢て之れが施設を怠らすといへども、往往にして卑野の手段に出で、公衆の同情を惹くこと能はず。彼等は嘗に内心眞實なる信念を以て基礎とせざるのみならず、外面徒らに負債償却を標榜し、中には私利を食み自家を肥さんとするが如き不屈者もあるやに聞ゆ。實に言語道斷の次第にして、佛教界の腐敗此に極せりと謂ふへし。焉んぞ以て經濟事業の整理を爲すことを得んや。否、否、却つて負債を増し、不整理と爲るもの、比比皆然らんや。或はお祭り騒ぎを爲し、或は寺格引き上げ騒動を爲す。其の醜、寧ろ惡むべきものどす。今にして速かに之れが矯正を斷行し、之れが整理を厲行せずんば、畢竟、經濟問題のために、此等の諸宗派は門徒を失ひ、末寺を失ひ、地所を失ひ、殿堂を失ひ、遂に其の

宗派を擧げて、滅亡の厄を招くに至るべきなり。教育事業の完成は教界將來の運命に關すること甚だ重大なるも、現在教界の安危が依りて繫るところは、主として此の經濟の整否に在りと斷定せざるを得ず。

宗教界も亦社會の一部なり。随つて生存競争は宗教界に行はるゝや必せり。而して生存競争の第一要素は即ち資本にあり即ち經濟にあるや論を俟たざるなり。現に眞宗本願寺派の如きは、比較的富裕なるが故に、海外傳道等の事業に向つて活動することを得、随つて其の教域を擴め、其の教基を固うすることを得るあり。是れ生存競争場裡において優勝者たるを得るものにあらざるならんや。其の他の宗派は海外傳道を模することさへ出來ざるが上に、僅に内地に望みし、辛うじて其の生命を保持するに過ぎざるは誠に慙れむべきにあらざるや。眞宗本願寺は一佛乘海なるが故に、其の活動を爲すこと、喜悅に堪へざるのみならず、猶進んで確實なる大活動を成さんことは余輩の希望して已まざるどころなり。然れども、之れを以て新舊基督教に比せんか、猶小雀の大鷲におけるが如く、未だ彼等いづれもの敵手たるにおいては、甚だ遠しと爲さるへからず。況んや其の他においてをや。余輩は佛教全體のために長大思せざらんを欲するも豈に得へけんや。果して然らば、如何なる方法に依りてか、此の最大急務なる經濟事業の整頓を爲すべき乎。聞く歐洲にありては基督教に屬するものは、國家の補助と、公衆の寄附と、自有の資産とに依りて整頓せらるると、然れども國家の補助なき宗派に

ありては、或は煙草會社等を設立して其の収益を以て維持するものあり。我が日本においては、布教に對する國庫の補助なるものは分庫もなし、さればとて煙草會社を起して、村井兄弟會社、若しくは岩谷天狗商會と角逐するの餘資もなければ、幸にそれ迄までで俗化せられず。然れば則ち公衆の寄附と自有の資産とに依るの外なしと爲すへき乎。

公衆の寄附、是れ從來皆目的としたるものなり。然れども、從來當局者が執りたるが如く、寄附を欲して寄附を求む、換言すれば、寄附が欲しさに寄附を頼むといふの手段は、決して宗教家たるの性質に合ひ又宗教家たるの品位に適へるものにあらず。余罪は第一に熱心なる傳道に依りて、公衆に大慈悲を發起せしむると共に、大いに布教弘法の思想を湧涌せしむるの方法を執るべく、随つて自然に善財の喜捨を爲す者生じ、此に清淨にして功德ある寄附を得へきなり。かの社會一般に公其心を生じて、慈善事業を重んずるに至り、或は學校に、或は病院に、或は圖書館、さては寺院等に寄附すること、英國又は亞米利加合衆國において、最も頻繁に行はるゝを見る。此の公其心なるものは、教育の力に依ること少なからずといへども、宗教の感化に依りて生ずること、最も顯著なりとす。公其心、即ち慈悲心の一種のみ。此の精神を涵養すること、實に今後佛敎界布教の一大目的とすへきものと信ず。從來の説教には佛心を詳説するも、此の慈悲心を懇説せず、或は此の慈悲心を懇説するものあるも、此の公其心を明説せず。乃ち佛敎界に實際的、社會的、公其的の振はざるは、要

するに之れがためにして、説教上、常に注意すべき要目とすべく、傳道に上此に顧みんか、其の功果甚だ見るべきものあらん。而るを現んや學校、病院等、社會的公共事業に裨益を興ふること亦大なるに於いてをや。是れ蓋し根本的整理策にして多額の寄附は求めず欲せずして集まり來り、其の貢獻するところ單に經濟上に止まらざるへし。其の上において、寺院は其の本末を論せず、之れに屬する門徒信徒の共有物たるの觀念を注入して、以て彼等相互が宗教的の用にも社會的の用にも此の寺院を使はしめ、之れに依りて其の維持擴張の負擔を別たしむること是れ亦必要なり。

自有の資産、之れあるものは、普通の公債を初め、銀行又は會社の株券、その他、地所、家屋に改め、一は以て公共事業の資助と爲し、一は以て自の資産の利殖を計るべきなり。或は自ら此等公共事業を發起して、單獨に之れが管理を爲すも可なり。若しくは他と協同して之が支配を爲すは猶可なり。凡う公其心と及び安全なるを以て條件と爲し、其の範圍内においては、如何なる事業を爲すとも、敢て咎むべきにあらずらん歟。然れども、資産なきものに至りては、如何すへき乎。無論、之れを特別寄附に仰ぎて、五個年乃至十個年、若しくは無限に、年々に又は月々に收納して、之れを銀行等に託して貯蓄し、以て一定の價額に達するを待ちて、後之れを前記の方法に依りて、其の利潤を取り、以て傳道事業等に費やすべきなり。而して其の處に達せざる限りは、決して積極的の事業を經營することを止め、専ら消極的保守的態度を執る

左の一篇を寄せ來る、一讀の價值なしとせず乃ち此欄に收む

記者 識

あはれなる精神病者

水谷斗南

橋上欄干の影暗き所、肉破れ骨現れ、寒に泣かんとするも、涙盡きて流れず、餓に叫ばんとするも、聲枯れて響かず、氣息奄々、行歩踰跟、僅かに杖に倚り、兒に扶けられ、伏して一文の哀を、行人の脚下に乞ふの、薄倅漢を見れば、誰か之か爲に一掬の涙を濺かざるものあらんや、毒水混々として流れ、田圃爲に瘠せ、草木爲に枯れ、財を靡し産を盡し、漸やく膝を容るゝの陋居は、屋漏り壁破れ、價となるべきものは鬻ぎ、金となるべきものは典して、既に一物の目を遮るものなく、四六時中怠るに非るも、明日の食を貯ふるの餘裕なく、僅かに一椀の糟糠を啜りて、辛ふして其魂の緒を維さつゝある、某地の慘狀を觀れば、誰か悲まざるものあらんや、幼にして慈親を喪ひたる孤兒、良人の無情に泣く婦女、鐵窓に繋がる、囚人、世路の險難に悲ひ寡婦、多病の才子、薄命の佳人、勞働者、藝妓等、渠等か悲惨の境遇に在るを見、薄倅の運命に接するを聞く、心あるもの、誰か暗涙を催さざらんや、

雖然、彼の貧民の生涯、素より慘、而かも門前に佇みて、破三味線を彈するを聞きては、覺へず涙を流して、麵包の一片を興ふるの慈善家あるに非ずや、彼の某地の災民の境遇や、

へし。尺蠖の屈するは、其の伸びんがためなり。苟くも偉大なる且つ永續する活動を期する以上は、必ずや相当年月の沈黙静止を要す。眞宗本願寺派の如きは、此の點において稍成功したるものと謂ふべきも、猶慎重の歩調を以て、駁進躍動を致すへし。いささか富裕なるの故を以て自ら安んじ、早く已に濫費の弊あるが如きは、最も戒しむべきこととす。

其の外、冗員を淘汰し、奸僧を懲戒し、驕侈を禁制し、怠慢を叱責して、清廉活動の人物を以て充滿せしむること、固より大切なり。いはゆる勤儉と貯蓄とは、宗教界特に現今の佛敎界に在りては、最も經濟事業を整頓するの要訣たるを免れざるなり。

以上數回に跨りて記述せしところ、未だ余が意を悉せりといふこと能はざれども、略ぼ卑見を披瀝したり。若し此の二大要件にして、余が所説の如くに、完成整頓せらるゝを得んか、人物出來、資本出來、以て五大洲を席卷するにおいて何の難きことか之れあらん。要するに、日本の佛敎界は傳道師を出だして大活動を致さしむるを以て本務とすへし。而して之れに對して、完全なる教育機關と、堅固なる經濟機關とを具備せざるへからず。有爲なる我が日本の佛敎界は決して現今の状態を以て甘んぜざるへし。卑見若し可なるどころあらざること、獨り余が希望のみにあらざるなり。

(完)

亦固より悽、而かも瘠せたる田圃を眺めては泣き、枯れたる山林を暗ては悲むの、慘状を見れば、不知不識袖を露して、食はずんば、己れ先づ飢ゆるの食を恵み、着すんば、己れ先づ凍ゆるの衣を予ふるの、博愛家あるに非ずや、或は孤兒の爲に叫ひ、或は寡婦の爲めに愛へ、或は囚人の境遇に萬斛の熱涙を濺ぎ、或は勞働者の運命に一道の光明を傳ふるの、仁人義士あるに非ずや、

夫れ、斯の如く、同情の念に富み、博愛の心に長するの士、敢て少なからざるにも關はらず、而も其一人、果して能く精神的肉體的に絶望の溝壑に陥れる、精神病者の爲めに、一片の同情を寄せたるものある歟、數滴の熱涙を濺きたるものある歟、彼の貧民の生涯や悲惨、彼の災民の境遇や不幸、彼の勞働者の運命や薄俸、而も彼等は唯肉體的に絶望するのみ、未だ精神病者の如く、精神的肉體的に絶望の溝壑に陥れるものに非ず、彼の囚人や酸鼻、彼の寡婦や可憐、彼の藝妓や氣の毒而も尙肉體的に然るのみ、未だ精神病者の如く然るに非ず、彼等は尙將來一道の光明を認めざるなきに非ず、此は唯前途混沌たる暗黒あるのみ、且つ彼等は、時に必ずしも快樂を盡し得ざるに非ず、將た希望を達し得ざるに非ざるを、思ひ見よ、恵まれたる、一杯の濁醪は、以て一日の疲勞を醫するを得へきに非ずや、得たる數片の麵包は、以て餓に泣ける妻子の笑顏を見るを得へきに非ずや、凡そ世に三代の長者なく、亦七代の貧家なし、今日の紳士、豈明日の勞働者たるを知らんや、今年の貧民、豈明年の資本主たるなからんや、禍福は糾

へる繩の如く、貧富は轉する車輪の如し、人間萬事唯運命の奈何に在り、今は逆流に立ち、否運に沈める彼等も、一朝好運に會し、順風に乘るを得んか、一躍して、第二の岩崎大倉たるを得へけんも、知るへからず、大臣宰相と爲るを得へけんも、亦未だ知るへからず、彼等何んすれど、絶望の溝壑に陥れるものならんや、世波の激動に堪ゆる能はずして、却て絶望の溝壑に落ち、遂巡躊躇、左顧右眄、何の爲す所なく、何の施す所なく、蒼皇遂に馳せて、窮鬼の口に投ずるはこれ豈彼等か自棄自暴の致す所に非るなき歟、於是乎知る、彼等が今日、此悲況に沈みたる所以の者は、惟ふに社會の潮流に乗る能はざりしに依るへしと雖も、亦彼等が怠慢の爲めに此域に陥りたるの罪、蓋し免る、能はざるを、

反之、精神病者に至りては、哀れ、凡ての快樂なるものを其一身より褫はれたるものに非ずや、憐れ、有らゆる幸福なるものを、其一生より奪はれたるものに非ずや、希望ありと雖も、必ず達するを得ず、需求ありと雖も、必ず給するを得ざるに非ずや、况んや社會よりは、狂者として斥けられ、家族よりは、廢人として疎んせられ、法は以て容赦なく人たるの權能を奪ひ、律は以て遠慮なく鐵窓に投して顧みざるに非ずや、噫、空しく事なくして、配所の月を詠め、科なくして囹圄の中に呻吟する、豈とれ獨り當年の菅丞相のみならんや、孔夫子のみならんや、花の燼爛たるも、何んぞ醜を消すを得んや、月の皎々たるも何んぞ、憂を慰するに足らむ、雨の降る且、風の吹く夕、却りて往時を追懷して、轉た懊惱煩悶する

あるのみ、可愛の怙恃、今何くにか在すらむ、可憐の妻子、今何くにか倘佯ふらむ、思ひ來れば、眞個斷腸傷心の事耳、大凡、人何の爲に生くるや、乃ち快樂あるか故ならずや、何の故に活くるや、即ち希望あるか爲ならずや、既に希望の達すへきなく、快樂の求むへきなし、生きて何の用ぞ、活きて何の詮ぞ、斯の如くにして生き活くと云ふ、木偶木像と雖ども、猶生き活くと云ふへからずや、而も天下亦斯る道理なきを如何、嗚呼、精神病者は、呼吸ある木偶木像と云ふへきのみ、其名は人類にして、其實は牛馬よりも劣る、數等と爲すへきのみ、何等悲惨の運命ぞ、何等薄俸の生涯ぞ、

均しくこれ不幸なる、人の子に非ずや、而して一は、天下多數の同情を惹き、他は却りて社會の醜遇薄待を享くるは、將た何の故ぞ、吾人太た之を解する能はざる也、

さはれ、精神病者が、天下の同情を惹かざる、抑其所以なくんはあらざる也、由來我邦人、迷信の深き、精神病に罹れる者を目して、天罰とし、憑崇とし毫も病の爲に然るに非るもの、如く誤想する、これ其理由の一に非ずや、既に精神病は一種の病症たるを知る、然れども獨り此病は、如何なる名國手あるも、到底其妙術を施すに由なき、不治の難症也と斷念する、これ其理由の二に非ずや、精神病は、既に不治の難症たり、人一度此病に罹る、安んぞ社會の廢材たり、家族の厄介物たるを免るゝを得るものぞ、然り、吾人に何等の義務ありてか、斯る者を保護し哀憐するの要を見む、寧ろ如かず、檻窓に投して顧みさらんには、これ其理由の三に非ずや、蓋

其一是、迷信より來りし者、素より道ふに足らず其二是、今日日圭の術の進歩せしを知らざる、井蛙の見、亦固より論するに足らず、而も其三に至りては、人道を輕視し人情を無視したる、不倫非道の言、吾人愚なりと雖も、斯る冷血動物に誨ゆるの筆と舌とを有せず、又其事の痴たるを知る、知りて而して尙一言せざるへからざるは、默過する能はざる所あれば也、請ふ暫く區々の言を聞け、

夫れ、世の中に生を稟くる者、何者か病に逢はざるものやはある、資育の勇あるも、之に克つ能はず、蘇張の辯あるも之を屈せしむる能はず、孔孟の徳あるも、遂に之を免るる能はざりしを知らずや、古今幾億年、東西幾萬里、知らず、誰か能く病に克ちたるものある歟、何人か能く病に屈せざるものある歟、病は人をして失望せしめ、落魄せしめ、事業を挫折せしめ、志氣を沮喪せしむるのみならず、實に優者をして劣者と化せしめ、強者をして弱者と變せしむる、妖魔に非ずや、之を見よ、學古今を貫き、識東西を總ひの大學者も、病の爲には、如何ともする能はずして、社會の廢材として、悲むへき生涯を了するに非ずや、出ては萬機に參與し、入りては、妻妾の多きに誇るの貴公子も、亦病の爲には、如何ともする能はず、終宵病牀に呻吟して、不愉快なる月日を送りつゝあるに非ずや、千鎰の俸秩を得るの貴人、萬萬の貸財を有するの富豪も、亦病の爲には、如何ともする能はず、社會に於ける劣者、家族間に於ける弱者として、唯藥石に果敢なき命を托しつゝあるに非ずや、彼を思ひ之を思ふ、如何んぞ、病

者の爲に、泣かざらんと欲するも得んや、劣者は哀憐すべし、憎悪すべしに非ず、弱者には同情すべし、冷遇すべしに非ず、管に哀憐せざるべからざるのみならず、同情せざるべからざるのみならず、満腹の衷情を捧げ、満腔の熱涙を灑ぎて、此等の慰藉者となり、庇護者となるは、これ即ち人間相愛の情に非ずや、惻愷怵惕の天性を具する、人類の責務に非ずや、既に弱者と謂ふ、豈獨り貧民のみならずや、既に劣者と云ふ、豈亦獨り勞働者のみならずや、精神病者の如きは、實に劣者中の劣者たるものならずや、弱者中の弱者たるものならずや、而も世の冷酷なる、人の残忍なる、精神病者を見るや、憎悪すべしを知りて、哀憐すべしものなるを知らず、冷遇すべしを知りて、同情すべしものなるを知らず、則ち細縛し、則ち拘禁して、以て社會の責任茲に了り家族の情誼此に盡きたりと爲す者、滔々皆然り、慨するに禁ゆへんげや、惻愷の心なきは、人に非る也とは、蓋し之を孟軻子に聞く、我邦人は、人耶、魔耶、抑亦破句耶、吾人は、之を甄別する能はざるを憾む也

嗟呼、社會の慈善家よ、天下の博愛家よ、仁人義士よ、希くは貧民を憐むの心を以て、精神病者を憐めよ、勞働者に同情するの意を以て、精神病者に同情せよ、彼の悲哀なる寡婦に注ぐ、一掬の血を移して、之を精神病者の皮下に注げ、彼の酸鼻なる囚人に落す、數滴の涙を分ちて、之を精神病者の頭上に落せよ、更に希くは起て、精神病者の味方と成り、其悲惨なる境遇を描きて、これを天下に懸へよ、貧民と勞働者

るへき害毒を社會に流すに至らむ、吾人は社會風紀上當局者は宜しく其布教方法を審査して、斷然禁遏せられむことを切望す

### 内務省の干渉

(鑛毒事務所撤去)

鑛毒問題は今にして解決せられず、政府調査會を設けたりと雖も徒に名のみ存して實之に供はざる憾あり、而して鑛毒被害の人民は日一日より窮困の狀態に陥らむとす、政府の鑛毒問題に對する措置は緩慢よりも寧ろ酷に過ぐるの感なき能はず、學生の路傍演説を禁し、鑛毒被害地に到るを禁し偶々到るものあれば其筋より退校を迫るか如き、洵に不當の干渉にあらざるなきか、頃日聞く處によれば被害地渡瀬村の雲龍寺は從來鑛毒事務所に宛來りしに曹洞宗宗務局は其筋の嚴命により以後雲龍寺堂宇を以て鑛毒に關する一切の集會を禁し斷然事務所を撤去すべしとの命を傳へり、吾人は何故に政府はかゝる些々たる一個の事務所に干渉するや、殆ど其眞意を解するに苦むものなり、政府は被害人民に同情の念薄きものなりといはんも、何を以てか之を解くの辭あらむや

好し寺院殿堂は政治上の集會を避くべしとの理あらむも吾人は鑛毒事務所を以て純然たる政治上の運動と見做すこと能はず、多少政治上の意味を含みたりとて從來の慣例上、地方の寺院堂宇を以て屢々政談演説會場に宛たるにあらずや、今回

とのみ、必ずしも卿等の同情すべしものに非ず、寡婦と囚人とのみ、亦必ずしも卿等の相憐すべしものに非ず、而も此等よりも、より多く悲惨なる、滿伴なる精神的肉體的絶望の溝壑に陥れる、可憐なる精神病者の爲に、慰藉者となり、庇護者と成りて、天下に呼號するは、これ卿等の責務に非ずや否人たる者の一大義務に非ずや

### 社 會

#### 淫祠の蔓延

近頃、新聞雜誌上に於て淫祠邪教攻撃の聲絶ゆるにも拘らず、益々蔓延の兆候を來し滔々として底止する所を知らざらむとす、殊に帝都の中央に目も眩む程の華美なる天理教會堂の巍然として屹立せるあり、其他蓮門教の如きまた多く之に譲らざるなり、何ぞ迷信家の多きや、而るに最も奇怪なるは此迷信家を利用して益々迷路に陥らしめ、竊に自家囊中を肥さむとする不埒極まる妖俗の隠現出没是なりとす、頃日濱口某なるもの突如として都下に顯れ新聞紙上に迄廣告して、自ら眞言秘密の法を得たりと稱し、祈禱禁厭によりて如何なる病症をも治療し得ると吹聴し、祈禱料を貪り多くの迷信家を瞞着せむとする如き、其罪決して輕からざる也、文化發達の中心たる帝都の中央に於てこの事あらむとは、豈驚かざるを得んや、今にして淫祠の蔓延を防かざれば、人心を紊し恐

に限り殊更に内務省が自ら進て曹洞宗宗務局に迫りて撤去を命する如きは何たる無慈悲の極みぞや、

#### 選挙法の解釋

總選舉は愈々來らむとす、逐鹿場裡に馳驅するもの漸く多らむとす、運動の劇甚なるに従ひて選挙法違反者を生ずることとは免るべからざる事實ならむ、殊に今年の如き選挙法施行の結果として各地共に解釋を異にし區々の處分をなすに至らば候補者の迷惑此上なかるべし、元來法律の履行は選挙の神聖を保つにあれば可成自由の運動を興ふると共に各地共に其解釋を一にし其取締を同じくせられむことを望む

#### 教 界 彙 報

- ◎大谷會去月廿六日午後四時より例會を上野體育館に開き、過月師朝したる近角池山二氏の歡迎、此度帝國大學卒業生の祝賀を以て、頗る盛會なりし由
- ◎日蓮宗本山本國寺にては岩村日蓮師、今回管長の任期満了退任したるを以て、宗務總の役員は京都本山に至りて、多額の納金をなすものを推して管長と爲すの意見を洩したるに、末寺の住職等は之をき、大に激昂し今尙紛擾中なりと云ふ
- ◎去る二月下旬佛蹟巡拜を以て佛敎文學取調の爲め、印度に赴かれたる大谷派の織田得能師は、去る廿八日歸東せられたり
- ◎本願寺派法主大谷光尊伯は、故光澤上人附位御禮の爲め去る二十五日東上齋内せられたり
- ◎鑛毒被害民救濟佛敎會の事業として、被害民の爲めに施療院を設けつゝ、ありしこは賑々賑々せし、今回一先づ閉鎖せり云ふ
- ◎去る廿三日午後四時より上野體育館に於てマハラ氏の招待會を開きし

に出席者六十餘名にして、意外の盛會なりき。  
 ◎曹洞宗大學林にては別項廣告にも見はたる如く、第二回の夏期講習會を来る七月十日より二週間開催する由。  
 ◎印度參詣講の企 日本生命保險會社は付屬事業として印度佛陀迦耶參詣講を企てんとすの目論見あり五百人組とし抽籤を以て毎年五十人宛參詣することに定ぬ十年にて満講なる仕組にて時節は最も冷氣なる十月頃より十二月までの三月月とし最初一ヶ月は往航とし中の一ヶ月は滞在遊覽とし後の一ヶ月は復航に充て又日本郵船會社に交渉して賃金割引を行ひ一行費用總計約六七百圓にて足るべき概算なり。

◎刑事被告二千餘人 鍛冶橋監獄に於ける未決囚人は昨日増加し目下二千餘人以上に達し悉く收容し能はずして他の監獄に預くるも猶三層敷七八名の囚人を收容しつゝありと云ふ。  
 ◎陸軍院創設の經過 愛國婦人協會幹事佐藤陸軍少將等は牛ヶ淵御用地を借用し獨獨其他の例に倣ひ陸軍院を設立するの計畫あり奧村女史は此を勸誘の爲め目下名古屋地方に出張中なるが右は陸軍軍人にして戦時傷の爲め廢疾者として爲りたる人を收容するの目的なりと云。

雜錄

獨乙より (三)

K F 生

動物保護のさむぎで日本の鐵道馬車の馬も、はうかい節をやりに、菅笠を被たことも、去年の夏にはあつた様ですが、あいらが皆西洋風がふきおつた事で、こちらではまわりの通りに犬を大切にします、そして飼主はよくそのつを料理屋へ連れて、肉片をわけてやつたり、骨をしやぶらしたり

して居ます、小供もろの通りで料理屋へ連れていつたつて、決して日本の様に小供にも茶碗むし一人前、それに口取もなくていふことはありませぬ、夫婦が二人前をとつて、其中より小供にめぐんでやるのです、そして小供の方はビールも何も飲まないからやくすまうとすると、全くおいて、おいて御二人御ゆるりとめし上るといふ風です、尤も小供は至極平氣であるが、畢竟世間一般でよその小供もその通りだから、すんだもの、日本の小供のくひん坊と相ならへたら、それは、こちらの方はおとなしいのですよ、さうもよく出来てゐます、その代り可成の年になると、もう自分で小僧にもいく、自分でくふことを考へまして一向おやぢのすねをかちりませんから、さうなるより更に両親の制裁をうけない、随分娘の子が夜遊びをしようつても、勝手にどこかの男とコーヒやへいってふざけようつても、それは親共酒として關せず焉です、個人主義たるどころおもしるしいしかけになつてゐます、こちらへ參つて先づ驚いたのは瀛車の大きなことで、八人詰の一室ゆつくりとした樂なものです、尤もこちらの人體が大きいからでもありませんが、さうも樂です、寢臺列車等のせのこは、このひろいことをそれは、大きくて、その代りに時によるとこしかけが高くて足の短い日本人にはふらく、することがあります、鐵道電車もその通りで近角等は腰をふかくかける足はふらんとやつて居ます、とにかく車内に入るの定員は嚴重なもので一人もよけいにのせないです、瀛車の中に立往生をするといふ様な馬鹿なげいとうはこちらにある

りませぬ、ゆつくりと定員だけ居ますから至極ぬうちがあり、瀛車の方から御話しすと急行列車は通常列車より賃が高いらしいのである、急行列車になると一人前づゝの場代を賃の外の外に「これは極安いもの」とりまして、ちやんと他人がはいれない様に「席定まれり」といふ意味の札をつけます、これには四等までありまして、僕は二等より知りませんが室内の温度が至極よくあつ過ぎればさます様に寒むければ強くする様にしがけかあります、そして夜は電燈がつきますが、あまりあかる過ぎたらぬとおもへば電燈の外を包む黒らしやをおほひをかけますと程よくなります、但し電燈甚高くとせのひくい連中には如何にもすること能はず、ある瀛車は寢臺車でなくともわきに廊下がついてありますから時々廊下へ出てゐる事も出来ず、禁煙の室(僕も禁煙しました)にいつもをりました、他の西洋人でたばこののみた人はその廊下へ出て具へつつけのイスをおろして腰かけてゆつくりのんでゐます、便所もこれから通ひます手あらひ場凡て完全です、ろしてめし前には切符を賣りにくる、それをかつて場所をとつておいて食堂にゆきませぬことが出来ます、それから給仕が萬般の世話をします、いろがしくつて時がなくて急に列車の中へ飛び込んであづけるべき荷物をあづけずに困るときにはこの給仕が日本の赤帽と云つた様なものにそれをもたして荷車へやります、そして到着後に賃をはらへばよいといふ様な便利もありませぬ、荷主人夫はどのつても皆がんとじやうな人體で、カバンが大きなもの六つ位は一度にひとり

で持つて長い長いプラットフォームを選びます、人間の體力の強いには驚いたです、もう一人呼んでくれといつたら「何私一人で充分ですよ」と云つたときに感心しました、かくステーションは廣くてぎれからぎれへ行つてよいやら瀛車が十行も十二行もあちこちにゐてそれは、一面からひびく、なかに、いそがしい時にはこれらの張札を見て居るひまもありません、こんな時には此人夫よはさ調査です、瀛車のことにはまだありますが、とにかく僕は佛語も獨語も瀛車にのりおりする丈位は出来たから、大したまをつきはせませんでした、有難かつたです、電車はなか／＼澤山あります、佛蘭西は全く地下線はこちらはやはり日本の通りに空にかがガネを引張てゐます、これも三十八人定員なのは大きな長りなものです、三十八人定員のと二十八人定員のものと十二人定員のとあります、乗合馬車は車内十二人定員です、この定員といふのはちやんと腰をゆつくり掛ける定員にして、日本の様に草にぶらさがり連中等を定員とは申しませぬ、とも、あの草はこちらにも佛蘭西にもあります(佛蘭西ではぶらさがつて居た先生もありました)實は電車や馬車が動揺する最中にのり込み易くする爲、他の人にぶつからない爲に設けてゐるので、あれにぶらさがつてぶらぶら然とやるといふ主意ではないのですから、あれにとつかまる人員までを敷へこんで、小さな馬車に定員三十二人だとか二十七八人だといふのは大きなまちがひです、誰かしりませぬがこちらのを見て日本であれを真似させた

先生がどんだおもひぢがいか、若しくは大きな欲張主義のほらばり算段をやつた結果に相違ありません、あれをどうも上等と稱するやつにまで應用したのにはおどろきましたね、僕ももつと前にこれを知つて居たらせめても五厘の直上げに反對したのに残念です、東京の鐵馬會社は實にわるいのです、それから車内では凡て煙草をゆるしませんがこれは至極よい事です、そこでのみつ、乗込んだ人は厭者臺か又は切符切り臺にゐます、こゝにも定員があつて前も後も六人ときまつて居ります、それよりはほんなことがあつても乗せません、しかもうこれは日本のよりは廣いのです、こゝにおもしろいことは(佛蘭西でも)おなじ鐵道線路上に馬車も電車も通つて居ることです、佛蘭西では市内が地下線で市外が空中電線ですが、それもちやんと面倒なく連絡しておなじ線上を走ります、おもしろい事は、また佛蘭西ではこみ合ふときに定員以上にならない様に、こた／＼しない様に各大辻の出張所で番札を與へて居ます、それをもらつて辻に待て居ると切符きりが番號をよびます、よびれた次がのり込みときまつてゐますから、そんなもん日でも決して大混雑はしません、怪我もありません、それから佛蘭西では一電車ここからどこまで乗つても我十二錢(上等で)出せばよく獨乙ではどこからどこまで乗つて一電車一鐵馬一乗りが我五錢(上等はない)ですから共にゐなかもものに便利です、又兩國ともに切符はわたした切り、受取ることはありませんから至極面倒でないのです、つまり切符の半分を向ふに残しますからそれで決して勘定違ひはないの

佛教辯士の評判(六)

自稱辯士

その他乗合でない馬車(箱又はホロ)も兩國共時又は距離でちやんと價がきまつて居ますから、我等の様なものでもむさほられることはありません、佛國ではちよつと酒代をやりませがそれも、大低きまつた小額ですから更に苦はないです、伯林はもう一つ便利で「タクサメートル」といふ機械が(時計の様な)乗る人に見えるところにすえてありますから、長くはしければそれだけ其距離に應じて相當な賃錢をばらへばよい様にちやんと針が何十文といふところを指してくれませ、これが車輪のまはり數でちやんときまるのですから御者は全く食ふことが出来ませ、乗り手も更に争ひなく氣遣はなく針がしめして居るだけの金をばらひませ、これは餘程便利です、何でも日本の悪車夫が横着をせぬ様にこいつを輸入したらよいでせう、まだ色々報知したいことがありますがこんなには書くべきもいり、又かたがこりませますから一時にやりませぬ、あなたの方も出めがねでよひにはねがおれませうから、これやめて次にまはしす。(完)

對手としての演説は、佛教辯士數ある中、未だ多く其の比を見ず候。

◎村上專精先生 氣骨稜々、和顔愛語の中にチヨク／＼針先の露出するは先生持前の氣象と存候。

◎井上圓了先生 嘗て哲學館に演説して予の演説は徳利から味噌をふり出すが如しといわれしが、今の先生の演説は徳利から酒をはゆかざるも、徳利から塩位のところは確かに候。

◎黒田眞洞先生 大きな目をパチつかせて、時々警拔の言を放つ所、演説は場馴れずと雖、頗る書生向きと存候。

◎新井石禪先生 落語家的口吻を以て講堂の士女を翻弄せんとするところ而も悪くし、下品にして野卑、爾後都會の演説會には願ひ下げにしたきものに候。

◎脇田堯惇先生 能辯には相違なきも、言に貫目なく、オマケに、イヤニ知つた振りをするが肝癢に障り候。

◎赤松連城先生 雄辯能説、聴くものをしていかなる長時聞も倦く色なからしむるは先生の特色に候、然れども其の演説は時々活を入れたき心地致され候。

◎中山理賢先生 悲しくもなきに悲しそな聲を出し、泣きたくもなきに無理に泣くところなどは馴れたものに候、これにて先生の人格は判断致され候。

◎來馬琢道先生 辯説、態度、凡てに於てヒヨコ／＼する所宛然鬼の如く候、但し佛教式婚儀の席上にて、蓄音器にて婚姻の理由を演説せらるゝなごの慎重の態度もこれあり候。

◎石川成章先生 マジメになつて後生の一大事を高座の上

にて語らるゝ所は普通の理學士連の企て及ばざる所に候。

◎安藤鐵腸先生 單調にして變化なく、只聲を放つて言ひたいことを喋舌るのみ、演説の何者かは先生恐らく知らぬなるへし、こんな演説は廢められた方が人助けに候。

◎境野哲先生 順序も立ち多少抑揚もこれあり候へども、聊さか落着かざるどころ見受けられ候。

◎和田鼎先生 語尾短かく辯をつくるはぬどころ、厭味はこれなく候へども、人はドウデモ自分さへよければよいといふ様に取られ候。

◎百目木智理先生 最近の日に於て佛教辯士の仲間入をせられたるなれども、なか／＼隅には置けぬとの評判に候。

◎大河内秀雄先生 ロクなどころは似ぬもの、その態どらしき様子、無理に慷慨ふる邊は小兄の中山理賢先生にソックリに候。

◎弘中唯見先生 流石は演説家に候、潤澤にして推しのきくところ頗る男らしく候。

◎一二三盡演先生 能辯といふ邊に至ては弘中氏と難兄難弟なるも、辯説に多少の色氣を含み居るだけが耳障りに候。

◎高瀬泰成先生 能くも今時あんな演説を晝日中にやつて居られたものと感服致候。

◎中鉢雄舜先生 今一と奮發せられず候ては、槍舞臺には出られず候。

◎安藤嶺丸先生 盲蛇、物に怯むずとは先生の事なるへく、口を開く毎に腹の中が見透され候、今少し書物を讀まれて



は如何に候や。  
◎眞岡湛海先生 辯は感服せず候へども眞摯にして且つ懇切なるごころは聴者の感動を起し候。  
◎佛教辯士なるものはこれに限らず候へども、際立ちて異りたるものも無之候へば、今回はこれにて筆を擱くこと、可致候。

今昔

前田利家 (其六)

百目木 劍 虹

第四章

出仕—織田氏—稻生合戦—浪々の士

歳月の逝くや匆々として白駒の隙を飛ぶが如く、呱呱孩兒の犬千代も何時しか年を送り年を迎へて、天文二十年(一五五)一十四歳の春を迎へ、其年八月具足始めを爲す、固より未だ白而乳臭の少年のみ、其成業は前途尙遠しと雖、將に手腕を鍛へ心膽を練るへき修養満著の時期に荷めり、虚しく馬前の卒となり醉生夢死以て一生を終らむとせば止む、尙も撼天動地の大飛躍を試み偉烈を千古に傳へむとするもの、奚ひぞ此貴重なる修養期を徒爲に過して可なるへき、知らず彼は如何なる方法を案して根基を養ひ、他日活動の地步を占めむとはする、家にありて父兄の勞を助けむか些々たる二千貫の小

領より分ち得らるゝ所幾何ぞ、これ能く彼が喬々たる英才と躍々たる大志を充すの値あるへけむや、即ち彼は慈愛なる父母の膝下を去り、偉才を奮ふに足る恰好なる武將の幕下に仕を求めむとし、其時機の至るを待てり、嗚呼千金の鳳雛、南溟に飛はむとするか將た胡地に入らむとするか、  
果然此年尾張に於ける青年武將織田信長の幕下に、紅顔の少年犬千代は入り來りて五十貫の采地を給はりぬ、時や後奈良天皇の御宇にして、關東の北條氏康平井城を陥れて上杉憲政越後に奔り、陶義賢周防の大内氏に反して義隆自盡するの年なり、信長時に年齒十有八、  
その織田氏は小松内府市盛に出で、足利氏の世となりて期波氏に仕へて其領國尾張に移り、應仁以後、主家衰ふるに及び其權全く織田氏に歸し、其庶族に信秀あり、出て古渡に城きて居り、能く兵を用ひ英略あり、威名稍顯はる、犬千代出仕の年三月病て卒し、信長は即ち其嫡なり、此時に於ける信長の地位たる岩倉城に尾張の上部四郡を領する織田氏の嫡統信清あり、清洲には信知の斯波氏を擁して下四郡を管するあり、總に名古屋の邊を領して清洲の主家に隸屬する一裨將たるのみ、加ふるに知多愛知二郡の大半は今川氏の蠶食する所となり、同族内に軋り、外諸強に困めらるゝ貧弱なる一城主に過ぎず、而して其資性や聰明英智御宣しきを得能く群卒の心を收攬し仁慈博愛能く領民の威信を繼ぎ得んとするか、彼は不羈跌宕奇を愛し異を好み、放縱無賴毫も人言を用ひず常に大刀を帯て市井に出て他人の肩に憑て餅菓を食ふ傍若無

人の行を敢てし、保傳平手政秀數々之を諫むるも聽かず、世人をして目するに阿呆漢を以てせしむるに至りたる所謂腕白武將にして、未だ誠忠なる政秀か死を以て君を諫め翻然素行を改めしめ、銳意武略を練る時にあらず、又爛眼なる木下藤吉が有爲多望なる君主たるを看取し遠江より逐電し來り、小牧山麓に要して仕を要むる時にもあらず、犬千代何の見る所ありて五十貫の領に甘し一生の名譽と希望を賭し、得々此瘦武將の幕下に列り、危暴腕白なる信長の馬前に立ち殊力を盡して奮闘せむとはする、試みに比隣の群雄を見よ有爲の人君は吐哺握髮して異材を待ち俊髦を得るに汲々たるにあらずや、犬千代の故らに信長の幕下に入れるもの狂か狂にあらずむは愚たるに依らざるか、

蓋し願ふに前田氏の領たる極めて小に其境域は殆ど織田氏の領邑に包まれ、獨立の状態と云はむより、寧ろ織田氏幕下の臣僚たりしなり、此故に彼か父利春は彼を送りて織田氏に仕へしめ、犬千代また青雲の希望を達し偉勳を奏するの便否を考察し、然して後ち信長の幕下に加はりしにあらず、且らく織田氏に仕へて内外の事情に通じ、徐ろに英主を選んで雄志を遂げむとしたるならむ、而も鹿暴なる主君信長は平手政秀諫死の事ありて資性を一變し、有爲多望の英將たらしめ、比隣の群雄も矚目して其動靜を窺ふて相喜成し勇士劍を掲げ來て仕を求むるに至り、幸に更に主を選ぶの要なく長く木瓜の大旗に従ふて南船北馬彼が強猛なる活手腕を奮ひ得たるものならずや

彼は既に温袍の家庭に懐かるゝものならず、五十貫の領を食ひて主に仕ふる少年武士なり、固より一介の青侍に過ぎずと雖、事あるに及むでは、一死君に捧げ格闘忠を擡むてざるへからず、而して彼は出仕の翌年(天文二十一年)より小姓となり終始主君信長の左右を去らず恭順に仕へたりと云へば隣隣たる世路の艱難に惱まざる温良無垢の可憐なる紅顔兒は毫も氣隨腕白の舉動なく謹直に主命を奉したりしや知るへきなり

斯くて二十三年犬千代元服して名を孫四郎と稱す弘治二年(一五五六)信長は弟信行と隙を生じ、八月稻生合戦を見るに至る、此役信長は八百の寡兵を以て二千の敵兵に當り、其憐色ゆるを望み、呼喚して之を潰やすを得たりき、此時孫四郎は戰場に出て、信行の小姓頭宮井勘兵衛矢を發つて彼の右眼下に當つるや、射られし矢も抜かぬ、猛虎の勇を奮ひ、直に槍を操り進んで之を仆し、役後賞として百貫の加増を得るに至れり、  
十六(九?)歳の時信長公の御命弟勘十郎殿(後武)御中不和にならせられ稻生の合戦の時武藏守殿御人數三千計也信長公御人數七八百計にて御戦之時武藏守殿御小姓頭宮居勘兵衛と申者弓を持來り利家へ對し矢を放し利家の右の目の下に當り申候則其矢をぬかて槍にて突臥首を御取候此威勢を以て信長公御勝陣に成申候云々(利家夜話)  
而して此勇壯なる舉動が如何に信長の軍に利ある所ありしかは、他日彼が越前府中の城主となり、信長に謁して幕眷を繼

せられ、食後の雑談に語られたる一節に徴せ

(上略)信長公安土山御城に被爲成候て何とも御振舞被下  
鶴色々の珍物の上に信長公御引物と御自身被成候(中略)  
扱七八人末座に利家様御座候へは御引物被下候利家様若  
き時は信長公御傍に寝ね被成御秘藏にて候と御ざれ事御  
意には利家其頃迄大疑にて御座候罷を御取候て其方稻生  
合戦の刻十六七の頃武藏守内宮井勘兵工と云者の首を取  
候刻我等十一に成合戦初に候其首を犬俣なれ共此手柄を  
見よと我等の馬の上にて振候へは味方氣を得て只七八百  
計にて三四千の人数を押崩候其如く各手柄ゆへ个様に我  
等天下を静め萬事成就致候由御意にて扱も忝御誕に存云  
々(利家夜話)

知るへし彼が初陣の武勳か後年に至るまで長く信長をして  
忘れしめざらしを越えて永祿元年又左衛門利家と改め益、武  
功を奏せんとせり、然れども好事魔多く人生蹉跎多し、斯か  
る出藍の偉少年も信長の幕下に止まる能はず、去りて浪々の  
士となるの事變に遇ひぬ、この事たる同朋十阿彌なるの彼が  
腰刀の筈を盗めによる利家大に之を怒り直に信長に訴へむと  
するや、常に十阿彌を庇保せる佐々成政等辭を卑くし之を謝  
し直訴するなからむを請ふも思ふ所は敢て枉げざる剛直なる  
彼が氣象は遂に肯せずして信長に訴ふるや、平素哀憐するも  
のなり、此度は之を報せよとの主命止むなく之に従ふ、此に於  
て彼をして直訴せしめざらむとしたる十阿彌の庇保者は口を  
揃へて彼を嘲りて止まず、忿恚の念勃然として起り、遂に城櫓

下に十阿彌を刺すに至る、時に信長樓上にあり、其騒擾を聞て  
直に利家を殺さしめむとし、哀れ狼籍者たる汚名の下に一代  
の光榮を荷ひ得ず、空しく無残の死屍を横へんとせしが、柴田  
勝家森可成の信長に謝するあり縋に其怒を静むるを得て斬殺  
を免れ得しも、不埒者たる彼は全く罪を免さる、能はず永祿  
二年(一五五九)久しく謙直に奉仕せる主君の幕下より追放  
され、互に武を練り勇を競ひし同僚に別れ獨り主なき野武士  
となりて流離困頓の世路に立ち、磊々たる素璞を磨て晃々の  
美玉たらしめむとせり

會 報

會頭久我侯爵北陸巡回日記誌

富山市

十二日午前九時金澤市有志諸君數十名に見送られて、同驛を發して富山市に向  
ふ、富山市より乗杉教存氏來迎せられたり、高岡驛より大谷派管事佐々木徹成氏  
乘車して一行に加はる、十一時着、一行の下車するや、手島藏に於て敬發の煙火を  
打揚げられたり、多くの歡迎有志數十名に擁せられ腕車を連れて當日の會場豊潤  
宗光殿寺に着し、時に正午、午後一時三十分より、演説會に移る、傍聴者無慮千有  
餘名と註せられ、富田瑞峯師の會開の辭に續いて、富田觀運師は縣下各宗總代と  
して挨拶を述べて佛教徒同盟會の主旨を諸場で紹介し、次に光嚴寺住職 渡邊俊胤  
の僧侶四十餘名と團樂して同會の支部設立のこゝを相談せり  
翌朝又有志の請に應じて一行各々一席を試み勿々として入善に赴く、同地有慮  
者厚く周旋せられたるは一行の感謝して止まざる所なり

入 善

十四日入善に着せし頃既に正午を過ぎ、同地の有志一行を擁して是非一席の演  
説を請ふこゝ頗りなるを以て、一行暫時立寄りて大谷學士三十分間位演説せら  
る、魚津の有志者より電報を發して我等一行に饗飯を饗したる旨申込る、無下に  
斷るも如何と思ひ一行悉く二人曳の腕車を驅りて之に向ふ、滑川の演説時刻後  
を恐れて余と古館五十嵐二氏と共に魚津に寄りすして滑川義然守先着、直に演  
説をひらく、余及古館氏演説すると共に丁度一行も着、例の如く本多、龍川、乘  
杉の諸氏各々一席の演説を試み無事閉會を告げたるは午後六時過、一行悉く同寺  
に宿す、此夜寒甚し

滑 川

十五日入善を發して途中三日市を過く、同地の有志一行を擁して是非一席の演  
説を請ふこゝ頗りなるを以て、一行暫時立寄りて大谷學士三十分間位演説せら  
る、魚津の有志者より電報を發して我等一行に饗飯を饗したる旨申込る、無下に  
斷るも如何と思ひ一行悉く二人曳の腕車を驅りて之に向ふ、滑川の演説時刻後  
を恐れて余と古館五十嵐二氏と共に魚津に寄りすして滑川義然守先着、直に演  
説をひらく、余及古館氏演説すると共に丁度一行も着、例の如く本多、龍川、乘  
杉の諸氏各々一席の演説を試み無事閉會を告げたるは午後六時過、一行悉く同寺  
に宿す、此夜寒甚し

高 岡

十六日滑川を發して富山に出て滋車に乗りて高岡に向ふ、有志者數十名停車場  
に迎へらる、一同腕車を連れて宿所景望樓に着す、晝飯後會場たる同地劇場に到  
る、閉會の趣旨に次て古館、龍川、百目木、本多學士等演了し會頭の挨拶にて閉  
會を告げ、それより茶話會を景望樓上にひらき出席者百餘名非常の盛況なりき、  
依々木管事を初め佛教徒同盟會員諸氏非常に盡力されたるは一行の感謝する所  
なり

出町、石動町

十七日初高岡を發して一行は出町に向て發車す、余は夜來より氣分すくなく  
を以て途に出町に至らずして直に石動町に赴く、同地の會場は永傳寺にして一行  
の出町演説會を終りて發せし頃は午後二時過なりき、此日、晝飯後外に浴る、  
至る、例の如く演説會終りし頃は薄暮に近き頃なりし、此夜同地の有志諸氏と共に

師は侯爵の來臨を多謝し併せて希望を述べ、三上石川縣曹洞宗取締(佛教大體に  
就て)古館芳縁(活佛)百目木智建(同盟の趣旨)本多辰次郎(日本佛教)の諸氏順  
次登壇次に聽衆に感動を興へたり、夫れより佛教徒同盟會の臨時大會に移り、祝  
電祝辭の朗讀ありて後決議案を可決し、次に久我侯爵登壇して一場の挨拶あり、  
次に乗杉教存氏の發言にて、兩陛下阿殿下各萬歳及び久我侯爵萬歳を一唱して閉  
會を告げ、夫れより一行は富山ホテルに投宿す、即時同館樓上にて茶話會あり、來  
會者無慮百二十餘名席定まり、茶菓を配布したるや、會員牧野平五郎氏會員總代  
として閉會の辭を述べ次に久我侯爵の謝辭次に本多學士百目木智建及乗杉教  
存等諸氏の演説ありて、和氣霽々の裡に散會したり

旋轉者は古道管事、五十嵐成成、乗杉教存其他曹洞宗の僧侶信徒諸氏にして、  
一行の深く謝する所なり

此日演説後少閑を得て乗杉君を先導して本多古館の二兄及余(百目木)は亡  
友水崎智順君の靈を吊せんとて墓參したり、北堂出て來りてなにくれさなく物語  
せられ、聽て余等の辭し去らんとするや、潸然として老眼より涙の滂沱たるを  
禁ずること能はざりし、余等も爲めに愁然として去るに忍びざりき、會者定難生  
者必滅のことわり今更ならぬ、は、な、な、ま、の、は、げ、に、人、の、命、な、る、哉、此夜水崎君  
の物語をなしたつ、腹に就く

魚 津

十三日午前八時ホテルを發して魚津に向ふ、市外まで僧俗有志數十名觀送せら  
る、一行は古道管事、五十嵐君等と共にひたすら腕車を急かして進む、路は悪し  
行程約五里たるを以て正午漸く魚津に入る、沿道は北日本海に面し、海濱の風光  
中々すておたき所ありしは、せめてもの事なりし、町家悉く國旗を掲げ一行の若  
するや、煙火敬發を打ち揚げて歡迎の意を表されたり、一行の到着前より演説會  
場なる安城寺の境内に人山を爲し、雜踏一方ならされば、警官の注意も中々制し  
がたく見ふげり、殊に演説前後に盆を覆さん計りの大雨なるを以て、吾等の演説  
は聽衆にき、取れざるべしと思ひ、頗る困難をなしたり、聽て演説會に移る、塚  
本慶雲氏は先づ閉會の主意を述べ、次に古館芳縁、龍川洞宗、百目木智建、本多辰次  
郎の諸氏次々熱心に演説せり、最後に久我侯の挨拶あり、聽衆は大に感動せり  
さいふ、次に五十嵐氏の首領にて、兩陛下の萬歳と大日本佛教徒同盟會久我侯の  
萬歳を三唱して閉會したり、それより直に旗智樓にて茶話會を開きたるが、席上  
會頭並に本多學士百目木の演説あり、了て安城寺に歸り泊せり、今夜各派熱心

に懇談をなして終りに就く  
右にて越中一圓の巡回は終りぬ、何れも皆満腹の熱心を以て一行を歓迎せられたるは厚く鳴謝する所なり

羽昨、龍登部、七尾

十八日 石動町を發して龍州羽昨に向ふ、此日羽昨、龍登部、七尾の三ヶ所に於て演説會あるを以て、一行中古館維川兩氏、龍登部に赴き七尾にて會するに於て演説會ありぬ、羽昨驛に下車するや、道俗男女路を挟んで殆ど通行に苦む程の人出なりき、同地有志某の宅にて晝飯の饗を受け、會場本念寺に至る、北六一郎君一行を見送りて同地に來るを以て、幸ひに一席を辯せらる、余も本多學士は例の如く演し去りて會場の挨拶終るに共一行匆匆として七尾町に發車す、七尾町は夜會なりしを以て、漸く時間の後れざるを得たり、七尾の演説會場は長福寺にして夜分なるに拘らず、聽衆意外に多かりし、一行の演説凡て簡單なりと雖、十時半頃散會せり、一行は松葉樓に投宿す、同樓に於て刻移りしに拘らず、熱心なる有志者は茶話會を開きて一行を招待せられたり、總て會の終りし頃は十二時過ぎなりき、村上管事幹旋の勞を取られたるは大に謝する所なり  
十九日 一行中余は(百目水)分れて飯田に赴き、他は輪島に向ふ、飯田の事は「つまらぬ記」に收めたるを以てくしく記せず、輪島の記事は余は實地に見聞せざるを以て記載するに能はざれども、同地の有志者は少しも手落ちなく非常の優遇款待せられたり云ふ、二十日 一行悉く和倉温泉に會し一浴を試み二週日の疲を快復するを得たり  
以上北陸巡回の記事了りぬ、歸路尾州津島成信坊井に三州知立に於て演説會ありしも大同小異別に記さず、た、一行を歓迎せられたるを深謝す

新刊紹介

前田慧雲 花田凌雲合著  
◎碧述眞宗教史前編 本郷 文明堂  
著者は教科書之目的を以て教理の變遷を序述し、筆を三經の梗概に起し、其教系たる龍樹より源空に至る諸祖の傳記、教義を簡易に述べて三經の梗概に起し、其教系を以てせり、之を本編の大綱とす、親鸞以後の事實は後篇の出づるにあらざるは云々し能はずと雖、其簡明にして教理の大要を説くに至るは著述の目的を達せるもの云ふべし、固より斯新なる討究の結果を認むるを得ざるも、眞宗の教義の變遷を知らんとする人は試みて一讀して可なり(定價六十五錢)

曹洞宗 青年會 第一二回 夏期講習會

曩きに我曹洞宗青年會は、禪風の頹廢と知識の普及せざるを慨し、先づ其第一階段として昨年夏期講習會を開催し、以て宿望の一端を試みたり、然るに江湖の翼賛は殆んど最初の豫想以上ありしは、我徒の竊に光榮とせし處なり、於是乎、年々此會をして繼續せしめ、道念の修養を専らとし、傍ら知識の練磨に資し、又は談笑の間に相互の胸襟を開く等の便に供せんとす、冀くは各地方の道俗諸君、奮て此舉を贊助し同志を勸募して續々來會あらんとす、

- 一、會期 明治三十五年七月十日より二週間
- 一、會場 東京市麻布區北日下窪町曹洞宗大學林講堂
- 一、學科及び受持講師

- 碧 嚴 集
- 眼 法 道 話
- 證 道 漸 史 歌
- 佛 教 東 漸 史 歌
- 近 世 心 理 學
- 憲 法 要 義
- 臨 時 講 義
- 聽 講 料 金壹圓貳拾錢
- 申 込 手 續 聽講希望者は來る七月五日までに住所氏名を詳記して本會宛て申込むべし
- 講 習 證 全 科 聽 講 者 には 本 會 講 習 證 を 附 與 す
- 止 宿 附 帶 事 業 本 會 の 附 帶 事 業 と して 教 育 傳 道 、 傳 道 に 關 する 談 話 會 を 開 き 、 或 は 有 志 演 説 、 會 員 茶 話 會 等 を 開 く

東京麻布區北日下窪町曹洞宗大學林内

曹洞宗 青年會 夏期講習會

◎心靈上の修養 (濱口惠璋著) 全 上

著者は西本願寺の青年僧侶にして能女の聞かざる人なりと、本書は著者か折に關して信仰上の感興を記述せしものを集めて、佛陀、衆生、佛陀と人、信仰の生涯に入りの五章と編せしものなり、現今精神修養の隆盛なる時は是に志ある人は一本を求むるの要あり、(定價三十五錢)

西川光次郎著

◎カールマルクス 神田 中 庸 堂  
社會改良家マルクスの生涯を序し、終りに一言其主義學說に及べるものなり、社會改良の發たるとは空言にして下らば何卒の功を認むる能はず、要は其實の如何にあり、マルクスの如きは議論と實際の兩面に於て其功の偉なるものなり、社會問題の世に喧しき際、最もかゝる事に冷淡なりとの評ある佛徒は一讀し罷くべきなり(價十五錢)

◎幸福ある家庭 (本多澄雲著) 京都 法 藏 館

著者は常に家庭の問題に注意せる一人にして、此度極めて穩健なる主義に依り家庭の幸福を増進せしめんが爲、家員の心得へき條項を平易に序述せるものなり、布教に従事する人、または家庭の主たる人は讀んで心得べし(價八錢)

◎宗門時感 (渥美契芳著) 全 上

本書は村上博士の佛敎統一論に對し反對的意見を叙述したるものなり、添ゆるに著者の隨感漫言を以てす(價十錢)

入學募集

- 一 來九月第一級第二級若若干名入學相許し候條志願の者は七月三十一日迄に入學願書履歷書及手数料金五十錢相添へ願出へし
  - 一 高等小學(四年修業)第三級修了者は無試験にて第一級へ入學を許す此資格なき者は左の課目を試験す
  - 一 算術 高等小學讀本の類
  - 一 作文 日用文及漢字交り文
  - 一 第二級へ入學せんとする者は該級生徒の履修せし總ての學科を試験す
  - 一 官公立の中學校より轉入學する者は成績詮考の上宗乘餘乘の二科を試験し相當級又は次級へ編入す
  - 一 入學試験は八月二日より施行す依て受験者は其前日迄に本學へ出頭し指揮を受くべし
  - 一 右の外詳細を知らんと欲する者は郵券封入の上照會すへし
- 東京下谷區谷中眞島町一番地  
私立眞宗東京中學  
明治三十五年 五月

